

---

# 終焉への幕を。

海猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

終焉への幕を。

### 【Nコード】

N2615S

### 【作者名】

海猫

### 【あらすじ】

——いつか、いつかまた……会えるといいな。

## ぶろろーぐ。（前書き）

突発的に書きたくなったものです。駄文ですが、それでも大丈夫な方、お先にお進みください。

誤字・脱字がありましたら、連絡お願い致します。

ぶろろーぐ。

そろそろ、終わりの時間が近付いてきたみたいだ。

この場所も、割と嫌いじゃなかったし、楽しかったんだけどな。

ストーリーは崩せない。

運命に逆らいたいが、親愛なる我が友のためだ、覚悟を決めよう。  
いや、覚悟はとづくに決まってる。俺は怖いのだ。

全てが終わったとき、あいつはどんな選択をするのだろうか。

——コンコン

ノックの音が、静かな部屋に響く。

「失礼いたします。勇者一行がまもなく城に到着いたします。いかがでしょうか？」

俺の配下であるこいつも、思えば、なんだかんだで付き合い長かったな。

「道中と同じく、ここに丁寧に案内しろ」

「かしこまりました。失礼いたしました」

——ボタン

また部屋は静寂に包まれる。俺は1人、玉座に座り目をつむった。

さあ、ストーリーの終焉を迎えようか？

なんなんだ、これは。

俺、佐々木 要<sup>ささき かなめ</sup>は17歳の高校生である。

その日は、小学生の頃からの仲である千葉 大輔<sup>ちば だいすけ</sup>とともに学校から帰宅している途中であつた。

あいにく、クラスは違うのだが登下校は一緒に、大学の志望校も近かつたから、この関係は変わらず続くのだらうと思つていた。

他愛ない話をしているといきなり大輔が胸を押さえて地面に倒れた。明らかに尋常じゃない量の汗をかいていた。

「おい、大輔！どうしたんだ！？」

「か、かなめ……苦しい、胸が苦しいんだ。……あ、あつ！！助け  
て！いきたくない、行きたくないっ！」

大輔は喚くと、俺のズボンにすがり付き、しきりに行きたくないとか  
叫ぶ。そいいいながらも大輔の体はなぜか徐々に透けていくのだ。

「おい！おまえ体が消えてるぞ！どういふことなんだよこれはっ」

「呼ばれてるんだ、だれかにっ！！僕は行きたくないのに！要え、  
助け………」

大輔は消えた。文字通り、消えたのだ。  
残ったのは、大輔の鞆だけだった。

こんなにも大声を出していたのに、近隣の家から、誰一人として出てこなかったことが印象的だった。

大輔が消えてから1ヶ月が過ぎた。

大輔の存在は全ての人の記憶から消去されたらしく、誰に聞いてもわからないと言われる。

辛かった。

大輔がいないことが。

あいつは俺の恩人で、友で、家族だった。

虐待されていた俺の唯一の心の支えだったのだ。

まだ恩を返していないし、ずっと一緒だと思っていたのに。

大輔を探そうにも、探しようがなかった。

ところが、ある日。

休日だったので、部屋にいた俺は、突然胸に、いや全身に広がる激痛で床に倒れた。

苦しくて、もがく。

頭の中で、誰かが俺を呼ぶのだ。

ああ、痛い。

痛い。

どこか、頭の片隅で、これは大輔の時と同じなんじゃないかと、わずかながら希望を持ちつつ……

俺はこの世界から消えた。

目覚めたのは、ご立派な椅子。

目の前には部屋に入らないほどのヒトガタ、と、化け物。

しかし俺にはわかっていた。彼らは人間ではないということが。そして俺もすでに人間ではないということも。

情報は、既に頭に流れ込んでいて、俺はソレを受け止めていた。

俺は魔王であること。

ここは魔国であること。

今日の前にいる彼らは魔人と魔物であること。

人間とは相反する存在であること。

とにかく、たくさん。

海を挟んだ大陸の人間側で、勇者が現れた。ならばと魔族（魔人、魔物をまとめた呼び方）側は魔王を呼んだ。それが俺だ。

別に魔族が人間を脅かしているわけではない。が、昔から、この関係は変わらないし、そういうものらしいのだ。

俺はなんとなくわかっていた。

勇者は、大輔だということ。

なぜならば、勇者が現れたのは1月前なのだ。合わないはずがない。それに情報として、頭に入ってきていた。

俺はあることに感動した。

そして、自分の役割を即座に理解したのであった。

大輔が帰りたいと願えば、俺はあいつをもとの世界に返してやれる。ただし、これを実行するには、俺があいつと会って、あることを成さなければならなかった。

それは、ある意味シナリオをなぞることとなる。

すなわち、勇者が魔王の命を絶つこと。

勇者である大輔が、魔王である俺をあいつ自身の手で殺さなければならぬのだ。

でもきつと、魔王が俺だとわかれば、あいつは諦めるだろう。

優しい奴なのだ、昔から。

だから俺はこれらを認識するとともに、顔に面をかぶり、正体を隠すことにした。大輔はおそらく魔王の姿を知らない。

そして魔王として、魔族達の頂点へと君臨し続けたのだった。

あれから、5年という年月が過ぎた。……そろそろ、終わりだ。

複数人の足音が徐々に近づいてくる。

耳を澄まして音を聞き取りながら待つ。なかなか騒々しい。

暫くすると足音がピタリとやみ、扉が、開いた。

——ああ、久しぶり。俺はあいたかったよ。

「貴様が、魔王か？」

大輔が口を開く。懐かしい声。

「いかにも。そなたは、勇者だな」

「見ての通りさ」

「……今のところ、魔族は人間にちよつかいなど起こしていないし、逆もしかり。さて、勇者様は俺に何のようかな？」

わかりきっていても、とぼけてみる。あいつは案の定、顔を歪め、俺に宣言した。

「わかりきったことをっ！！僕は、貴様を撃つてもこの世界に帰るんだ！」

気迫がビリビリと伝わってくる。

「それがそなたの願い、か。何故帰りたいと願う？時間軸も違うこの世界で5年もたった今、そなたの世界はどうなっているかわからないのに？」

「待っている、奴がいるんだ。きっと僕を待っていてくれる。……それにつ、帰る時代時間等は望めば決められると聞いた。それは本当なのか？」

「真である。そなたの願いはわかった。……さあ、始めようか」

「それで終わりか、勇者よ」

大輔が方膝をつく。

「勇者様、諦めないで！」

「そうだぜ大輔、まだまだろっ！？」

大輔の仲間であろう2人が叫ぶ。2人とも、既に俺によって壁に打ち付けられて体が動かないようだ。

いい、仲間に巡り会えたのだな。  
しかし、ここで大輔が立ち上がったてくれなければ、俺も困るのだ。

「さっさと立て。千葉大輔よ。いや、弱虫だいちゃん、か？」

ビクツと大輔が反応し俺を見る。

「どこで、それを？」

「俺は魔王。そなたのことはわかるのだ。それで、諦めるのか？ならば、さっさと終わりにしたいのだが」

「うるさいうるさいうるさいっ！！僕は弱虫なんかじゃないっ」  
「ならば、証拠を見せろ。かかってこい」

「あゝ ああああ！……！」

これは、昔からあいつのトラウマだ。つついてやれば、逆上してくるだろうとは思ったが、予想以上だ。

怒濤の勢いで剣先が向かってくる。

受けて、流して、たまに攻撃して……わざとらしく倒れては絶対に気づかれるだろう。

その時、突然横から短剣が飛んできた。大輔の仲間の女かららしい。くそっ、あのノーコンめ。体がまともに動かないくせして投げるもんだから、大輔に刺さりそうになった。

急いで大輔と位置を変えた。結果的に、短剣は俺の肩に刺さり、体勢が崩れたところに大輔の剣が、俺の腹に突き刺さったのだった。

今度は俺が地面に膝をつく。ゆらりと揺れて、地面に倒れた。

大輔は信じられない目をして、俺を凝視した。

「なんだ、もう少し嬉しそうな顔をしないか。魔王を倒したんだぞ？」

大輔の仲間がいう。

「そ、そうよっ。帰れるのよ、勇者様！」

そうだ、もっと嬉しそうな顔をしてくれよ。

何故か真っ青な顔の大輔がわなわなと震えながら口を開いた。

「か、かな…め？要、なのか？」

倒れた拍子に面が取れたようだ。

最後の最後に失敗するとは、俺も馬鹿だな。

「なんで、お前が、ここに」

「はは、ばれちまった、な。大輔が消えてから、俺も、飛ばされたんだ」

「僕、要を殺した」

「まだ死んでねーよ。役目を終えるまで、魔王は死なない、死ねない。いくら死にそうだってな」

でも実はちょっとしんどい。

俺はゆっくりと腕を腹まで持つていくと、まだ刺さっていた剣を抜く。とたんにゴボリと噴き出す血。

「要！大丈夫？ねえ、要！」

大輔が必死な顔で俺の腹に手をあてる。そんなことしても血は止まらないってわかっていているだろうに。

「…大輔」

「うん」

「あとは、頼んだぞ？……我、魔王、佐々木要。魔王を撃ちし勇者、

千葉大輔の願いは古の誓約より果たされし」

ああ、酷くだるい。

でもあとはいつが願いをいうだけ。

俺の役は終わった。

「さあ、あと、は、お前のしごと、だ。おれは、もう、ねるな。いつか、いつかまた——」

会えるといいな。

ああ、眠い。

えびろーぐ。

要の体はどんどん冷たくなっていく。

消えていく命に愕然としながらも、僕は勇者としての役目を果たさなければならぬ。

でも、その前に、

「おやすみ、要。待ってて、すぐ、会えるから」

「お前、なにするつもりだよ」

「ここまで付き合ってくれてくれたこと、感謝してるよ。でも、ごめん。僕、帰れないみたい」

「なぜですかっ！？魔王は死んだのにっ」

ルーアが喚く。

そう、魔王は死んだ。

「そいつ、知り合いだったのか？」

これはリヤンの声、でも僕の視線は要に注がれたまま逸れない。

「僕の、全てだった」

いじめから助けてくれた。友達になってくれた。寂しいといったら、同じ高校に通うといって、ランクも下げてくれた。いつも、いっし

よだったのに。  
要に会いたくて、だから帰リたかった。  
なのに……

「要のバカ。僕を置いていくなよ」

後ろを振り反つて二人を見る。まだ動けないみたい。好都合だ。

「じゃあね、二人とも。僕は行くよ」

「……気を付けろよ」

リヤンはなんとなく察してくれたみたい。苦笑いをうかべながらも、止めずにいてくれた。なんだかんだで色々助けてもらったな。

「勇者様、なにするおつもりですか！」

ルーアはまだ喚いてた。うん、最後まで扱いに困る人だな。

ルーアは無視して、僕は右手に要の血がついた剣を、左手に要の体を抱えた。

「魔王を撃ちし勇者、千葉大輔。我が願いは――」

どうか、来世も共に。

そうして

幕は、閉じた。

えびろーぐ。(後書き)

お付き合いいただき、ありがとうございました。

少しでも楽しんでいただけたのならば、うれしいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2615s/>

---

終焉への幕を。

2011年4月8日18時36分発行